

「伝える」って何だろうか。

私の思う「伝える」とは目に見える形で、例えば口頭で言語として相手に情報を伝達することだった。しかしそれだけが「伝える」ということではないということを、私は共同通信社で学んだ。

共同通信社と聞くと、ありとあらゆる情報を取り扱っているということは分かるが、詳しくどんな仕事をしているのかは漠然としていた。共同通信社へ向かう途中電車に乗ったのだが、その車内ではドア上の小さな画面にニュース文が出ている。その右下には「KYODO NEWS」の文字。身近なところに共同通信がいたのだ。

私たちが訪問したのは、汐留にある本社。

共同通信社は全国に支社が6ヶ所、各都道府県45都市に支局を置いている。全国各地の情報を効率良く収集できる環境を設けているようだ。それだけではない。海外にも42ヶ所に総支局、10ヶ所に通信員を配置しているそうだ。

1945年に創立した共同通信社は国内外のニュースを取材また編集し、全国の新聞社や放送局、海外メディアに配信している。その海外メディアに対応すべく、日本語だけでなく英語や中国語、ハングル語でも情報を発信している。主にアジアを拠点に活動しているようだ。アメリカでいうAP通信、イギリスでいうロイター通信と言えよう。

共同通信社の仕組みとして、一連のニュースの流れがあることを知った。各出稿部や国内支社局、ビジュアル報道局、海外総支局、国際局から集められた記事や写真、音声などの情報は、ニュースセンターで編集される。私たちもそのニュースセンターを実際に伺ったが、上方にある多くのテレビで様々な映像が流れ、また社員の方々はパソコンと向かい合っていたり社員同士でコミュニケーションをとっていたり、「ピーー」という音と共にフラッシュと呼ばれるアナウンスを流していたりとまさに共同通信社の中核ともいえる雰囲気圧迫された。そんなニュースセンターはデジタル編成部と整理部、放送編集部という3つの部署に分かれており、デジタル編成部は主にデジタルコンテンツ(ウェブサイトなど)に、整理部は主に新聞社に、放送編集部は主にテレビ局やラジオ局に情報を配信しているようだ。各支局、部署、報道局それぞれフル活動してこそ共同通信社が成り立っていることがよく分かった。

私たちはそんな共同通信社を見学させて頂いた。少し高いように感じる床の下には沢山のコードが張り巡らされていることを発見した。パソコンなどの多くの機材を取り扱っている社内で、コードが引っかかったり絡まったりするのを防ぐためだそうだ。また、他に気づいたこととして本社は上から見ると三角形であること。3辺となるところで、3つの部署に分かれていた。共同通信社の編集局は調査部や外信部、文化部、社会部、海外部など多くの部署がある。その中でも私が興味を持ったのは2つある。

1つは写真部や映像音声部などのビジュアル報道局だ。取材したのとして写真や映像は、私の中ではとても抽象的なものだし、一目で大まかにそのニュース内容を把握するために必要なものだと思うからだ。ビジュアル報道局は、写真や映像を入手、編集するが、それらは全てデジタル化し、現像のままにはしないそうだ。多様にデジタル化した現代社会を映しているような気がした。68

もう1つは、海外部や多言語サービス部などの国際局である。その部署では実際に外人が何人か働いており、興味を惹かれた。海外の取材にも疑問があった。新しいところ(海外)で取材をするにおいて、どうやって調査するのか、ということだ。私たちを案内してくださった小野さんは、日本の警察取材と同じだとおっしゃった。取材先と仲良くなって信頼を厚くしてから取材をするそうだ。そう考えると、やはりコミュニケーション能力が必要なんだと思った。

共同通信社では現在、約1600人の人々が社員として働いている。そのうち約半分、800人が記者だそうだ。コピーをとったりするアルバイトの方も多く見受けられた。泊りがけで仕事をこなす社員の方々のために社内に

宿泊所が設けられているが、設備が整っており快適そうだった。

また、小野さんに共同通信社で働くにあたって必要な要素をお聞きしたところ、4つあるとおっしゃった。1つは好奇心、2つ目は先ほど言ったように取材先と信頼関係を築けること、3つ目は情報が間違っていないか疑えるという猜疑心、4つ目は謙虚さだそうだ。私はこれを聞いて感心した。共同通信社における「仕事ができる」ということはこれらの要素が揃っているということである。アナウンサーのように口頭で表面的に視聴者にニュースを伝えるわけではないが、発信源としてしっかりとした心構えを持って取材しよう、伝えようとする共同通信社の社員の方々は心からカッコいいと思った。

さらに私たちは社内見学後、兵庫高校の方々との交流があった。兵庫高校も、仙台二高と同じようにライバル校との定期戦があるようだし、宮城は東日本大震災、兵庫は阪神淡路大震災という、同じ被災地としても共通点が多いことを知った。お互いに校風や被災地の今を紹介し合ったが、分かりやすく伝えるために写真や図などを使ったりなどの工夫が互いにできていていいなと思ったし、内容もすんなりと頭に入ってきた。思っていることを聞き手に伝えることの難しさを身を持って実感した。

また、兵庫高校の方々は阪神淡路大震災を実際に体験した訳ではないが、私たちは小学5年生のときに東日本大震災を体験している。実際に被災している人間として、他県の同世代の人にあの状況を「伝える」ということは一種の使命だと思うし、そのまま風化させるのは次世代のためにも良くないと思う。

震災もそうだが、日本では毎日何らかの天災や事件事故、誰かの快挙、歴史を変える出来事が起きている。世界規模で考えるとさらに多くのニュースが駆け巡る。共同通信社に1日に集まる情報量はざっと新聞誌面およそ70ページ分だそうだ。

思えば、私は新聞をあまり読まないことに気がついた。読むとしても、私は野球が好きなのでスポーツ欄の野球記事くらい。社内見学の際に、「只今から編集会議が始まります」というアナウンスが耳に届いた。続々と会議スペースに集まる社員の方々。新聞誌面約70ページ分の記事の中から、トップ記事候補とトップ級の記事を決める会議だそうだ。大きく誌面に載るトップ記事だけで、これだけの人が集まって会議をする。私は自分が何だか恥ずかしく感じた。毎日、共同通信社の方々が全国あるいは世界各地で取材し、寝る間も惜しんで編集、精選し、発信する。一見シンプルにも見える過程だが、どれだけの手間がかかり時間がかかるか。それがよく分かった貴重な時間であった。私はこの濃密な時間を通して、メディアの仕事にさらに興味を持ったし、「伝える」ということの意義を知った。

2020年、東京でオリンピックが開催される。共同通信社はその国内公式通信社に決定した。今は東京五輪に纏わるニュースとしては不安が膨らむニュースばかりだが、2020年は希望あるニュースが共同通信社から全国へ発信されるといいなと思う。私はその時21歳。メディアにもっと触れて、もしかしたら共同通信社で自ら発信している身かもしれない。まだまだ先のことは分からないが、いろいろな形の身近なニュースというものを、共同通信社で学んだ「伝える」ということの難しさや意義を思い出しながら見てこれから成長していけたらと思う。

お忙しい中私たちのために時間を割き、丁寧に優しく案内して下さった小野さん、共同通信社の皆様、貴重な時間を本当にありがとうございました！